生きる意味

Junko Higasa

夏目漱石の談話の中で心に留まる言葉がある。「小説（家）」について話して記録されたそれは、人生にも通じると思うので、以下に列記する。

『標準は自分でなくてはならん。自分を以て人の標準に合せしめようとするのは、自己の特色を没するものだ』『日本には、日本固有の特色がある。其特色を発揮することが何よりえらいのだ。同時に自己の特色を発揮するのがえらいのだ』『凡て物を判断するの標準は世と時とを問はず現在が標準である。自己が標準となるのである』『凡ての発達は如何にしても人間に気力―精神がなければ出来ぬ。精神といふのは自分はこれだけの事が出来るという自信自覚の力である。この自信自覚の無い国民は国民として起つことは出来ぬ。個人としても堕落したもの、自ら立つといふことは出来ない』

まず、上記の言葉は部分抽出であるから、一部の言葉だけを見て全体を評する批評家のような短絡解釈をしないでほしいということを喚起する。これは決して自己中心的に生きろと言っているわけではない。自ら立つことの大事を言っているのである。

さて、では本来の「小説（家）とは」の観点からすると、漱石は日本は日露戦争で勝ったけれど、それに即して入ってきた西洋文明に負けたと言っている。即ち流行的西洋模倣に警告を発している。小説は表現者も日本人としての特色を発揮し、批評家もその観点から批評しなければならない。作家が日本の観点から描くものを、西洋の観点から「これではダメだ」というのは正しい批評ではない。作家も批評家も「昔からの標準や東西の標準ではなく、現在の日本の標準」に立つべきではないかという。そして作家は日本固有の特性の上で自己の特色を発揮できなければ西洋の模倣にならざるを得ず、文学制作でも特性を備えたものはできないという。これは決して西洋を拒否せよというわけではない。西洋だからと無暗に崇拝せずに、東西どちらであっても正しいと思うものを正直に選べということだ。その上で作法として「事件ばかりを書くのではなく写生的に描く。写生的とは話の筋ばかり書かないで全体を躍出する様に描写する方法だから、要件ばかりでない余裕が生まれる。実際の用事としては不必要だけれど、活動させるのに必要な光景とか余話を持ってくると自然と事件が発達する」『本当の活動してる物を背景として其中に世の中の物を活動してる様に描くのが真の色彩である』「文章家とは文章の巧い人ではなく物の解釈が深い人。物を観察する、物を感じる力を備えるには自然を観察すること」これは漱石が好きな美術にも通じる。レオナルド・ダ・ヴィンチの絵はとことん自然を観察するところから生まれた。

さて、これを「人生」の考え方に応用してみよう。どんな時代にあっても「現在の標準をもって日本人たる自覚を持ち、その上で人間としての自己の個性を発達させよ」と聞えないだろうか？世の中は動いている。「今までこうだったから」に縛られていては発展しない。しかし「今はこうだから」と無暗に流されては自己を失う。また一見無駄に思えることも無用であるとは限らず余裕も必要だ。生き方上手とは解釈が深い人。「人がこうであるから自分もこうする」では「自分」とは何者か。世界に対して日本人としての自覚を持ち、自己の特性に則して生きること。それが人真似ではない本物の人生であり、一個人としての「生きる意味」ではないだろうか？(2013.2.27)